

## 聖書ヘブライ語に見られる地域差について

著者	池田 潤
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	38
ページ	1-15
発行年	2000-10-20
その他のタイトル	Regional Dialects in Biblical Hebrew
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/9849">http://hdl.handle.net/2241/9849</a>

## 聖書ヘブライ語に見られる地域差について<sup>1</sup>

池田 潤

生きた言語には時代や地域、話し相手や伝達媒体によるバリエーション、すなわち言語変種が存在する。聖書のヘブライ語も例外ではない。聖書の大部分は、言語的に多彩な原資料をもとに最終的に南ユダ王国<sup>2</sup>の標準語（以下、ユダ語<sup>3</sup>と呼ぶ）でまとめあげられた文章である。しかし、そこにもやはりある程度のバリエーションが見受けられる。私は別稿でその概要をまとめ、ケーススタディとしてヘブライ語聖書列王記下における 'et' の省略例を時代差、地域差、媒体差の観点から分析した<sup>4</sup>。その結果、当該コーパスにおける 'et' の省略は文法的な問題ではなく、北イスラエル方言の特徴であるという結論に達した。

本稿では、この北イスラエル方言をさらに掘り下げてみたい。まず、ヘブライ語聖書における地域差をめぐる研究史を概観し、イスラエル語の特徴を発見するための方法を提示したうえで、この方法を用いて新たなイスラエル語の統語的特徴をひとつ指摘したいと思う。以下、「ユダ語」と対比させるため、北イスラエル方言を「イスラエル語」と呼ぶことにする。

### 1. 研究史

聖書学者はヘブライ語聖書に地域差が存在することにかなり前から気づいていた。まず、前世紀末に書かれた *An Introduction to the Literature of the old Testament* (New York, 1894) の中ですでに S. R. Driver が列王記のエリヤとエリシャをめぐる話等に北イスラエル起源 (North Israelitish origin) の特徴があると指摘している。たとえば、2人称女性単数の独立人称代名詞はユダ語では 'at であるが、それが 'atti となること。また前置詞 'et「～と(ともに)」<sup>6</sup>に接尾代名詞が付くとユダ語では 'itt-と読むが、それを 'ot-と読むこと。あるいは、女性単数の指示代名詞はユダ語では zō(ʾ)h であるが、それが zōh となることや、bā-, lā-等の前置詞が付くとユダ語では定冠詞 ha-が脱落するが、ha

一が保持されることなどを、Driver はイスラエル語の特徴としてあげている。

今世紀にはいると、C. F. Burney が *Notes on the Hebrew Texts of the Books of Kings* (Oxford, 1903) という本の中で列王記の中の北イスラエルに関する箇所について、同様の指摘を行っている。また、W. R. Harper は *International Critical Commentary* シリーズのアモス書・ホセア書の巻<sup>7</sup>で、言語（アラム語の影響など）と内容の両面からホセア書が北イスラエルで書かれたと主張している。

今世紀の中頃には、コヘレトの言葉（伝道者の書）が注目を集めた。まず、F. Zimmerman が1944年の *Society of Biblical Literature* の学会で「The Aramaic Origin of Qoheleth」という研究発表をしている。彼はこの発表の中で「コヘレトはもともとアラム語で書かれ、その後ヘブライ語に訳された」と主張し、賛否両論の議論を巻き起こした。賛成派には H. L. Ginsberg<sup>8</sup>ら、反対派には M. Dahood<sup>9</sup>らがいる。この時期の研究の傾向として、言語学的アプローチが弱いという点を指摘しておきたいと思う。文法的な特徴も少しは取り上げるのだが、賛成派も反対派も主な論拠は語彙と正書法の問題である<sup>10</sup>。

最近の研究としては G. A. Rendsburg の一連の論文が注目に値する<sup>11</sup>。その素地となったのが、Avi Hurvitz による *The Chronological Significance of "Aramaisms" in Biblical Hebrew* という論文である<sup>12</sup>。Hurvitz はこの論文の中で聖書ヘブライ語に見られるアラム語的特徴をテキストの年代決定に利用するための方法論を提示している。一般にアラム語の影響が見られると、その箇所は後代に書かれたとみなされることが多いのだが<sup>13</sup>、Hurvitz はこの姿勢に疑問を投げかける。アラム語の影響があっても、それは必ずしもペルシア時代のアラム語の影響とは限らず、もっと古い時代のアラム語の影響の可能性も考えられる。そのため、アラム語的特徴を根拠にある箇所が後代に書かれたと主張するには、一定の手続きが必要だと Hurvitz は考えた。まず、当該の特徴が内容から見て明らかに後代に書かれた箇所にも現れることを検証しなければならない。次に、その特徴がペルシア時代のアラム語に見られることを聖書外資料で証明する必要がある。そして、これら2つの条件を満たす言語的特徴が聖書のある箇所に集積していれば、その箇所が後代に書かれたと断定することができるというのが、Hurvitz の提示した方法論である。

Hurvitz の方法論を地域差の問題に当てはめたのが、Rendsburg だと言うことができる。Rendsburg の体系的な研究により、これまでに創世記49章、ネヘミヤ書9章、ダビデの最後の言葉（サムエル記下23：1-7）、いくつかの

詩編が北イスラエル起源とされている。また、*Morphological Evidence for Regional Dialects in Ancient Hebrew*の中で、彼はイスラエル語の形態的特徴として14の事項を列挙するとともに、統語面での研究は今後の課題であると指摘している<sup>14</sup>。Rendsburgの努力により、地域差の問題は次第に注目を集めるようになり、最近ではこの問題を扱った学位論文も増えてきている<sup>15</sup>。

## 2. 方法論

Hurvitzが時代差の研究のために提示し、Rendsburgが地域差の研究に応用した分析方法には、①opposition, ②distribution, ③concentration, ④extra-biblical sources という4つのキーワードがある。

聖書テキストは基本的にユダ語で書かれている。文章の中に見え隠れするイスラエル語の特徴を拾い出してゆく際にまず手がかりとなるのは、標準ユダ語の文法に合わない語形や構文である。たとえば、ユダ語の独立代名詞の2人称女性単数形は<sup>ʾ</sup>atであるが、それとは異なる<sup>ʾ</sup>attiという語形がある場合、それはイスラエル語の特徴の候補となる。しかし、<sup>ʾ</sup>attiをイスラエル語の語形とみなす理由が別にあったとしても、<sup>ʾ</sup>attiと対立する語形がユダ語に存在しないかぎり、ユダ語の独立代名詞の2人称女性単数形もまた<sup>ʾ</sup>attiであった可能性を排除することができない。これが①のoppositionの意味するところである。これを、本稿ではバリエーションと呼び換えたいと思う。ひとつのコーパスの中に<sup>ʾ</sup>at/<sup>ʾ</sup>attiというバリエーションがある場合、いつ<sup>ʾ</sup>atが現れ、いつ<sup>ʾ</sup>attiが現れるかを記述する必要が生ずる。そのバリエーションはひとつの形態素の異形態であるかもしれないし、完全なフリー・バリエーションかもしれないが、一方が標準ユダ語の文法に合う形で、他方がそうでない場合、このバリエーションは地域差の候補となる。

次に、①の条件を満たす特徴が聖書の中のどこに出てくるかを調べる必要がある。これが②のdistributionである。これを本稿では「テキスト内分布」と呼ぶことにしたい。北イスラエル王国の歴史を記した箇所は言うまでもなく、北イスラエルないしはその周辺の場所やそこに住んでいた人物に言及する箇所は北イスラエル起源の資料に基づいて書かれた可能性が高い。また、明らかにユダ地方で書かれた文章に北イスラエルないしはその周辺地域やその住民が登場する際には、著者が無意識にイスラエル語へのコードスイッチングを起こしたり、意図的にイスラエル語なまりで文章を書いたりする可能性がある。さら

に、北イスラエル王国の首都サマリアが陥落する前後には北王国の住民が難民となって南ユダ王国内に流入し、ユダ語とイスラエル語の激しい言語接触が起こったと考えられる。そのため、サマリア陥落後に書かれた文章には、たとえユダ地方で書かれていても、イスラエル語の影響があってもおかしくない<sup>16</sup>。

①と②の条件を満たす言語的特長が聖書中のある箇所にもいくつも重なりあって見つかる場合、それは北イスラエルがらみの箇所であると断定することができる。これが Hurvitz や Rendsburg の言う concentration の意味である。したがって、③は特定の言語的特長がイスラエル語のものであるかを判断する基準ではなく、あるテキストが（もともと）イスラエルで書かれたものであるかどうかを判断する基準であると言える。

ただし、②と③の基準は循環論法に陥る危険性をはらんでいる。聖書中には書かれた地域や年代がはっきりしない箇所も数多く存在するが、聖書中にユダ語、イスラエル語以外の方言Cがあり、Cがイスラエル語と2～3の特徴を共有していると仮定しよう。書かれた地域や年代がはっきりしない箇所のひとつにすでに分かっているイスラエル語の特徴のひとつ（これを仮に特徴Aとしよう）が見つかり、その箇所がイスラエルがらみの箇所であると仮定したくなるものである。この仮定は常に誤っているとはかぎらないが、この箇所が実はC方言で書かれたもので、特徴Aがたまたま方言Cとイスラエル語とが共有する特徴のひとつであった場合、誤った循環論法を導く危険性がある。すなわち、この箇所はイスラエル語で書かれたという仮定に基づき、その箇所に現れるA以外の特徴で①の条件を満たすもの（実はC方言の特徴）をイスラエル語の特徴であるとみなす→これらの特徴が現れる箇所（実はC方言で書かれた箇所）を探していくと、一連の特徴がいくつも重なりあって見つかるため、これらがイスラエルがらみの箇所であるという確信が強くなっていく→これらの箇所がイスラエルがらみの箇所である理由付けが（こじつけであれ）なされると、これがテキスト内分布の判断基準として一人歩きをはじめ…。こうして、いつのまにかC方言の特徴がイスラエル語の特徴として誤認されてしまう可能性がある。

この種の循環論法を避けるために、重要な役割を果たすのが extra-biblical sources（聖書外資料）である。もっとも重要なのは、ゲゼル、テル・カッシーレ、サマリア地方等で書かれたヘブライ語碑文である。これら実際にイスラエル地域から発見された碑文に現れる言語的特徴はほぼ確実にイスラエル語の特徴とみなすことができる。ただし、これらの碑文は数が少ないため、これらに

よって確認できるイスラエル語の特徴はわずかである。そこで重要となるのが言語地理学的な分析である。北イスラエルと南ユダを地理的に見ると、前者の方がフェニキアやアラムに近く、フェニキア語やアラム語の影響をより色濃く受けていることが予想される。言い換えれば、パレスチナの南から北に向かってユダ語…イスラエル語…フェニキア語・アラム語という地理的な連続性 (geographical continuum) が存在し、この連続体の中間に位置するイスラエル語にはフェニキア語やアラム語と共有する言語的特長もあったと予想される。したがって、イスラエル地域から発見された碑文で確認できなくても、フェニキア語やアラム語の資料から地理的に連続する分布を成していると判断できる言語的特長は、イスラエル語の特徴とみなすことができる。この判断基準を本稿では「地理的分布」と呼ぶことにする。

本節のまとめとして、以上の方法論を具体例にもとづいて例示しておこう。別稿で扱ったヘブライ語聖書列王記下における <sup>ʿ</sup>et の省略例を例にとると<sup>1)</sup>、それがイスラエル語の特徴であることは次の証拠によって証明される。

- ① バリエーション (opposition) : 動詞の直接目的語が文法的に定の場合、その前に <sup>ʿ</sup>et を付けることと、付けないことがある。なお、<sup>ʿ</sup>et を付けるのが標準ユダ語の規則である。
- ② テキスト内分布 (distribution) : 75%が北イスラエル王国に関する記述の中に現れ、残りの25%もすべてアラム王に言及する箇所かサマリア陥落後の南ユダ王国に言及する箇所に出てくる。一方、サマリア陥落前の南ユダ王国に言及する箇所には <sup>ʿ</sup>et の省略例がまったく見られない。
- ③ concentration : これは (特定の言語的特長ではなく) 特定のテキストがイスラエル語のものであるかを判断する基準なので、このケースには関与しない。
- ④ 地理的分布 (extra-biblical sources) : アラム語とフェニキア語では <sup>ʿ</sup>et に相当する「対格のしるし」を通常つけない。したがって、分裂王国時代における <sup>ʿ</sup>et の用法は「アラム語・フェニキア語…イスラエル語…ユダ語」という地理的に連続した分布としてとらえることができる。

### 3. イスラエル語の特徴：yākōl十不定詞

本稿の冒頭で述べたように、過去に指摘されたイスラエル語の特徴については、別稿でその概要をまとめたので、ここで改めてそれらを列挙することはし

ない。ここでは、上で触れた「統語面での研究は今後の課題である」という Rendsburg の指摘にこたえる意味もこめて、管見のおよぶ限りまだ誰も指摘していないイスラエル語の統語的特徴をひとつ指摘したいと思う。それは、助動詞 *yākōl* 「～できる」の目的語となる不定詞の用法に関する特徴である。

ヘブライ語聖書中に *yākōl* は180回登場する。そのうち、不定詞をともなわない例が45あり、次の3タイプに分類することができる（太字は *yākōl* の変形）。

- ① *yākōl* が助動詞ではなく「打ち負かす」という意味の動詞として使われる場合

wayyar(ʾ) kī lō(ʾ) **yākōl** lō wayyiggaʿ bəkaḅ-yārekō...

and-he-saw that not **he-prevailed** to-him and-he-touched at-socket  
-of-hip-his

ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので…（創世記32：26）

- ② 助動詞 *yākōl* の目的語となる不定詞が省略されている場合

wayyaḥtərū hāʾanāsīm ləhāsīb ʾel-hayyabbāsāh wəlō(ʾ) **yākōlū** kī  
hayyām hōlēk wəsōʿēr ʿālēhem

and-they-rowed the-men to-return to-the-land and-not **they-could**  
because the-sea growing and-storming against-them

乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。（ヨナ書1：13）

- ③ 名詞、代名詞等が助動詞 *yākōl* の目的語となっている場合

ʿad-mātay lō(ʾ) **yūkōlū** niqqāyōn...

until-when not **you-can** innocence...

…いつまで清くなりえないのか。（ホセア書8：5）

一方、*yākōl* の目的語として不定詞を明示する場合、不定詞に前置詞 *lə-* を付けることと付けないことがある。前者は111例、後者は24例ある。言い換えれば、不定詞が *yākōl* の目的語となる場合、不定詞には原則として前置詞 *lə-* を付けるが、*lə-* の付いていない例も2割弱見られるということになる。後者の例をすべて拾い出してみると、次のとおりである。

### 3. 1. *yākōl* が *lə-* なしの不定詞を目的語にとる例

以下のデータは4行1組となっている。各組の1行目は聖書からの引用箇所

(書名、章番号、節番号)、2行目はヘブライ語原文のローマ字転写、3行目は英語への対訳、4行目は日本語訳である。日本語訳は新共同訳をそのまま引用した。文脈がある程度わかるように節全体の訳を引用し、原文を省略した部分の訳は括弧に入れた。また、yākōl の活用形および不定詞は、そのローマ字転写と対訳を太字にした。最後に、対訳中の「acc」と疑問符(?)は、それぞれ <sup>acc</sup>et (注4参照) と疑問文の文頭に付けるヘブライ語小辞 ha- を示す。

創世記24:50

...lō( ) **nūkal dabbēr** 'elēkā ra' 'ō-ṭōb

...not **we-can speak** to-you bad or good

(ラバンとベトエルは答えた。「このことは主の御意志ですから、) わたしどもが善し悪しを申すことはできません。」)

創世記37:4

wəlō( ) **yākəlū dabbērō** ləšālōm

and not **they-could speak** him to-peace

(兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、) 穏やかに話すこともできなかった。

創世記44:1

...ka āser **yūkəlūn s'ēt...**

...as-much-as **they-can carry...**

(ヨセフは執事に命じた。「あの人たちの袋を、) 運べるかぎり(多くの食糧でいっぱいにし、めいめいの銀をそれぞれの袋の口のところへ入れておけ。)

出エジプト記2:3

wəlō( ) **yākəlāh** 'ōd haṣṣēpīnō...

and not **she-could** any more hide-him...

しかし、もはや隠しきれなくなったので、(パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。)

出エジプト記18:18

...lō( ) **tūkal** 'asōhū ləbaddekā

...not **you-can do-it** by-yourself

(あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう)

う。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、) 一人では負いきれないからだ。

出エジプト記18：23

...wəyākoltā 'āmōd...

...and-you-can endure...

(もし、あなたがこのやり方を実行し、神があなたに命令を与えてくださるならば、) あなたは任に堪えることができ、(この民も皆、安心して自分の所へ帰ることができよう。)

民数記22：37

...ha 'umnām lō(') 'ūkal kabbōdekā

...? -indeed not I-can honor-you

(バラクはバラムに言った。「あなたを招くために、何度も使いを送らなければなりません。どうして来られなかったのですか。) あなたを優遇することがわたしにできないでしょうか。)

民数記22：38

...hāyākōl 'ūkal dabbēr mō'ūmah...

...? -can I-can speak anything...

(バラムはバラクに答えた。「御覧のとおり、あなたのところにやって来ました。) しかしわたしに、何かを自由に告げる力があるでしょうか。(わたしは、神がわたしの口に授けられる言葉だけを告げねばなりません。)

申命記1：9

...lō(') 'ūkal lōbaddī sō'ēt 'etkem

...not-I-can by-myself carry you

(そのころ、わたしはあなたたちに言った。)[わたしは、ひとりであなたたちの重荷を負うことはできない。]

申命記7：22

...lō(') tūkal kallōtām mahēr...

...not you-can finish them fast...

(あなたの神、主はこれらの国々を徐々に追い払われる。) あなたは彼らを一気に滅ぼしてしまうことはできない。(野の獣が増えて、あなたを害することがないためである。)

申命記14：24

...ki lō( ) **tūkāl sə`etō**......that not **you-can carry-it**...

(あなたの神、主があなたを祝福されても、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所が遠く離れ、その道のりが長いため、収穫物を) 携えて行くことができないならば、

申命記22：29

...lō( )-**yūkāl šalləḥāh kol-yāmāw**...not-**he-can divorce-her all-days-his**

(共に寝た男はその娘の父親に銀五十シケルを支払って、彼女を妻としなければならない。彼女を辱めたのであるから、) 生涯彼女を離縁することはできない。

士師記8：3

...ūma(h)-**yyākōltī`asôt kākem**......and-what-**I-could do like-you**...

(神はミディアンを率える將軍オレブとゼエブをあなたたちの手に、お渡しになったのだ。) あなたたちと比べて、わたしに特に何ができたというのか。(彼がこう語ったので、彼らの憤りは和らいだ。)

イザヤ書46：2

...lō( ) **yākōlū mallēt maššā`**......not **they-could deliver** burden...

(彼らも共にかがみ込み、倒れ伏す。) その重荷を救い出すことはできず (彼ら自身も捕らわれて行く。)

イザヤ書47：11

...lō( ) **tūkālī kappərāh**......not **you-can purge-it**

(だが、災いがお前を襲うと それに対するまじないを知らず 災難がふりかかっても、) 払いのけられない。(思いもかけない時、突然、破滅がお前を襲う。)

イザヤ書47：12

...`ūlay **tūkālī hō`il**......perhaps **you-can profit**...

(まじないと呪文の数々をもって立ち向かえ。若い時から労して身につけ

たものがあるいは役に立ち(それを追ひ払うことができるかもしれない)  
ハバクク書 1 : 13

...wə**habbîṭ** ʾel-ʿāmāl lō(?) tū**kāl**...

...and-look on-toil not you-can...

(あなたの目は悪を見るにはあまりに清い。) 人の労苦に目を留めながら捨てることにはない。(それなのになぜ、欺く者に目を留めながら黙っておられるのですか。神に逆らう者が、自分より正しい者を呑み込んでいるのに。)

詩編 18 : 39

...wə lō(?)-yū**k**lū qū**m**...

...and-not he can rise...

(彼らを打ち、) 再び立つことを許さない。(彼らはわたしの足もとに倒れ伏す。)

詩編 36 : 13

...wəlō(?)-yā**k**əlū qū**m**

...and-not he could rise

(悪事を働く者は必ず倒れる。彼らは打ち倒され) 再び立ち上がることはない。

詩編 78 : 20

...hāgam-lehem yū**k**al tēt...

... ? -also bread he can give...

(神が岩を打てば水がほとばしり出て、川となり、溢れ流れるが、) 民にパンを与えることができるだろうか (肉を用意することができるだろうか。)

ヨブ記 4 : 2

...waʿ**ṣ**ōr bəmillīn mī yū**k**āl

...and-refrain with words who he can

(あえてひとこと言ってみよう。あなたを疲れさせるだろうか) 誰がものを言わずにいられようか。

ヨブ記 33 : 5

ʾim-tū**k**al hā**ṣ**ībēnī...

if-you-can answer me...

答えられるなら、(答えてみよ。備えをして、わたしの前に立て。)

箴言30：21

...wəṭāḥat 'arba' lō( )-tūkal sə'ēt

...and-under four not-it-can carry

(三つのことに大地は震え) 四つのことに耐ええない。

哀歌1：14

...bīdē lō( )-ūkal qūm

...in-hands-of not-I-can rise

(背いたわたしの罪は御手に束ねられ 鞭とされ、わたしを圧する。主の鞭を首に負わされ 力尽きてわたしは倒れ ) 刃向かうこともできない敵の手に (引き渡されてしまった。)

### 3. 2. テキスト内分布

3.1. であげた24の例文のうち、士師記8：3は北イスラエルに直結する箇所である。これは、北部のメナセ出身のギデオンがやはり北部のエフライムの人々に語ったことばである。北部の人間どうしの会話の中に la- の付かない不定詞が使われている点は興味深い。

次に、詩編78：20 (アサフの詩) と詩編36：13は Rendsburg の研究によって北イスラエル起源の詩であることが論証されている<sup>1)</sup>。ヨセフ物語 (創世記37-50章)、申命記、ヨブ記、箴言に関しては、これらの詩編ほど確定的なことは言えないが、内容や正書法の面から北イスラエル起源である可能性が指摘されている<sup>2)</sup>。

ハバクク書はカルデア人の台頭に言及しているため、サマリア陥落後に書かれたと考えられる。また、イザヤ書からの3例はいずれも捕囚期に書かれたいわゆる「第2イザヤ」に属する箇所である。哀歌もバビロン捕囚期に書かれた作品である。上で述べたように、サマリアが陥落した前後には北王国の住民が難民となって南ユダ王国内に流入し、ユダ語とイスラエル語の激しい言語接触が起こったと考えられるため、これらもイスラエル語の影響が予想される箇所である。

その他の箇所については、北イスラエルとの直接の関係は認められない。しかし、創世記24：50はアラム・ナハラタイムに住むラバンとベトエルのことばであり、民数記22：37-38はユーフラテス河流域に住む古い師バラムとモアブ王バラクの会話である。また、出エジプト記18章からの2つの例はモーセとミディアン人の祭司エトロの会話で、出エジプト記2：3はエジプトを舞台にした

モーセ出生譚の一部である。したがって、これらの箇所は北イスラエルに直結こそしないものの、非ユダ的な文脈であることは確かである。特に、アラム・ナハラタイムやユーフラテス河流域は、地理的には北イスラエルの延長線上にあるので、地理的な連続体の中でとらえることが可能である。

3.1. であげた例の中で南ユダに関連するものは詩編18:39 (ダビデの詩) だけである。これを別にすれば、南ユダ関連の箇所では *yākōl* の目的語となる不定詞に前置詞 *lā-* を付ける例は存在しない。一方、前置詞 *lā-* を付けない例の7割は何らかのかたちで北イスラエルとの関連が認められる。このことから、*yākōl* の目的語となる不定詞に前置詞 *lā-* を付けないのは、イスラエル語の特徴である可能性が高いとすることができる。

### 3. 3. 地理的分布

最後に、聖書外資料を参照することにより、上記の言語的特徴の地理的分布を確認しておきたい。

ヘブライ語碑文で *yākōl* が確認されているのはアラド碑文の40番だけである<sup>20</sup>。そこには、*yklm lšlh 't h[...]* (they-can to-send acc x) 「彼らは…を送ることができる」と書かれている。この碑文により、聖書時代の南ユダで *yākōl* の目的語となる不定詞に前置詞の *lā-* を付けていたことが確認できるが、同時代の北イスラエルで前置詞の *lā-* を付けていたかどうかを確認できる碑文資料は残念ながら存在しない。

近隣の諸言語に目を向けてみると、フェニキア語でこの構文を1例確認することができる<sup>21</sup>。

*'st tkl ḥd...*

woman she-can stroll...

「女性が歩くことができる(場所)」(カラテペ碑文 A II の5-6行目)<sup>22</sup>

この解釈が正しければ、イスラエル語は「*yākōl* の目的語となる不定詞に前置詞 *lā-* を付けない」という特徴をフェニキア語と共有していることになる。

## 4. 結 論

本稿では、ヘブライ語聖書における地域差をめぐる研究史を概観し、イスラエル語の特徴を発見するための方法を提示し、この方法を用いてまだ誰も指摘していないイスラエル語の統語的特徴をひとつ指摘した。その結果を要約する

と、次のとおりである。

- ① バリエーション: yākōl「～できる」の目的語となる不定詞には、前置詞の lə- が付くことと (111例)、付かないことがある (24例)。
- ② テキスト内分布: lə- を付けない例の7割は何らかのかたちで北イスラエルとの関連が認められる。
- ③ 地理的分布: フェニキア語にも yākōl の目的語となる不定詞に前置詞 lə- を付けない例がある。

以上のことから yākōl の目的語となる不定詞に前置詞 lə- を付けないのは、イスラエル語の特徴であると主張したい。

#### 注

- 1) 1999年10月25日に日本聖書神学校において1999年度日本旧約学会総会に引き続き「旧約聖書と言語」という特集テーマで討論が行われた。本稿は、その際に筆者がおこなった研究発表にもとづいている。なお、ヘブライ文字のローマ字転写に用いる特殊文字とその推定音価 (IPA 表記) は次のとおりである。

'[ʔ], '[ʁ], h [h], š [ʃ], š [ʃ].

また、子音字の上下の横棒は摩擦音、s と t の下の点は強勢音、母音字の上の横棒は長母音、母音字の上の ^ は子音字 w, y によって表記された長母音を示す。

- 2) 古代イスラエル王国は紀元前1050年頃、北部ベンヤミン族出身のサウル王によって建てられたが、南部ユダ族出身のダビデ王によって紀元前1000年頃にユダ王国と統一された。しかし、ダビデの息子ソロモンの死後、統一王国はふたたび南北に分裂し、北イスラエル王国は紀元前722/1年にアッシリア帝国によって、南ユダ王国は紀元前587/6年にバビロニア帝国によって滅ぼされた。南ユダ王国の上層階級はバビロンに連行されたが、紀元前538年にアケメネス朝ペルシアのキュロス王によって解放され、ユダ地方に帰還した。なお、ヘブライ語聖書の最初の5つの書 (いわゆるモーセ五書) はバビロンで現在のかたちにとまとめられ、それ以外の書は帰還後に編纂されたと考えられている。
- 3) 列王記下18:26, 28の yəhūdîṯ を訳した呼称。ちなみに、ヘブライ語聖書には 'ibrîṯ 「ヘブライ語」という語は存在しない。
- 4) 伝統的に nota accusativi 「対格のしるし」と呼ばれてきた小辞。動詞の直接目的語の前に置かれるが、文法的に定でない直接目的語には付かない。しかし、直接目的語が定でないのに 'et が付いている例や、直接目的語が定なのに 'et が付かない例や、動詞の主語に 'et が付いている例も散見されることから、'et を単に「強調のしるし」と見る立場もある。詳しくは、B. K. Waltke and M. O'Connor, *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax*, Winona Lake, 1990, § 10.3 を参照。

- 5) 池田潤「聖書ヘブライ語における言語変種：概観とケーススタディ」『京都産業大学国際言語科学研究所報』第20巻（2000年），179-204ページ。
- 6) この前置詞の自由形は定の直接目的語を示す *'et* と同形である。
- 7) W. R. Harper, *A Critical and Exegetical Commentary on Amos and Hosea*, International Critical Commentary, Edinburgh, 1905.
- 8) H. L. Ginsberg, *Studies in Koheleth*, New York, 1950.
- 9) M. Dahood, Canaanite-Phoenician Influence in Qoheleth, *Biblica* 33 (1952), pp. 30-52, 191-221.
- 10) なお、この問題に関する最新の研究は J. R. Davila, *Qoheleth and Northern Hebrew*, *MAARAV* 5-6 (1990), 67-87 という論文である。Davila は諸説と言語データを綿密に検討した結果、コヘレトは北方的という結論に達している。
- 11) Dual Personal Pronouns and Dual Verbs in Hebrew, *JQR* 73 (1982), pp. 38-58. Bilingual Wordplay in the Bible, *VT* 38 (1988), pp. 354-357. The Ammonite Phoneme / *T* /, *BASOR* 269 (1988), pp. 73-79. The Northern Origin of "The Last Words of David" (2 Sam 23, 1-7), *Biblica* 69 (1988), pp. 113-121. *Linguistic Evidence for the Northern Origin of Selected Psalms*, 1990, Atlanta. The Northern Origin of Nehemiah 9," *Biblica* 72 (1991), pp. 348-366. Israelian Hebrew Features in Genesis 49, *MAARAV* 8 (1992), pp. 161-170. Morphological Evidence for Regional Dialects in Ancient Hebrew, in W. R. Bodine (ed.), *Linguistics and Biblical Hebrew*, Winona Lake, 1992, pp 65-88.
- 12) Avi Hurvitz, The Chronological Significance of "Aramaisms" in Biblical Hebrew, *IEJ* 18 (1968), pp. 234-240.
- 13) バビロン捕囚からの帰還後、約200年間、ユダはアケメネス朝ペルシアの支配下にあった。ペルシア帝国の公用語がアラム語であったため、この時代にアラム語がユダヤ人の間に浸透していった。詳しくは、A. Sáenz-Badillos, *A History of the Hebrew Language* (trans. J. Elwolde), Cambridge, 1993の第5章を参照。
- 14) Rendsburg, *Morphological Evidence*, p. 70の注17。
- 15) G. A. Wolfe, Non-judahite Dialects within the Hebrew Bible: An Evaluation of the Methods and Evidence, Ph. D. dissertation: The Southern Baptist Theological Seminary, 1997や Yoon Jong Yoo, *Israelian Hebrew in the Book of Hosea*, Ph. D. dissertation: Cornell University, 1999などがその一例である。
- 16) C. H. Gordon, North Israelite Influence on Postexilic Hebrew, *IEJ* 5 (1955), 85-88参照。
- 17) 池田潤, *ibid.*
- 18) Rendsburg, *Linguistic Evidence* の第4章と第10章を参照。
- 19) ヨセフ物語については月本昭男訳「創世記」岩波書店, 1997, p.191, 申命記と箴言については H. L. Ginsberg, *The Israelian Heritage of Judaism*, New York, 1982を、ヨブ記については D. N. Freedman, *Orthographic Peculiarities of the Book of Job*, *Eretz-Israel* 9 (1969), pp. 35-44を見よ。
- 20) Sh. Ahituv, *Handbook of Ancient Hebrew Inscriptions*, Jerusalem, 1992

(Hebrew), p. 88. アラドはユダ南部のネゲブ地方の町で、ヘブライ語碑文は聖書時代の層から発見されている。

- 21) W. R. Garr, *Dialect Geography of Syria-Palestine, 1000-586 B. C. E.*, Philadelphia, 1985, p. 187-189. なお、同時代のアラム語では基本的に khl + 未完了形という構文で「～することができる」を表現するため、アラム語は参照対象にならない。
- 22) 母音を表記しないため、ある程度解釈の幅があるが、ここでは tkl を ykl の未完了形 3 人称女性単数ととり、hd を Garr (ibid.) にならってアラビア語の hyd 「to stray」と同語根の動詞の不定詞と解釈した。